

青木繁の再発見作品紹介—《かるた》《漢詩かるた》—

植野健造（福岡大学）

明治の洋画家・青木繁（1882－1911）の芸術の中心をなすのは、油彩画や水彩画などの絵画作品である。しかし一方で、詩や俳句、短歌、文章など文学的方面にも豊かな才能を示す作品の断片を残し、さらには余技的に制作した扇面の書画や絵入りの羽子板、かるたやしおりなどの作品群にも、近代日本の芸術家中傑出した装飾家、能筆家としてのみごとな才能を見てとることができる。

友人たちの証言によれば、青木はかるた取りを得意とし、学生時代には友人を多く集めてかるた取りに興じ、そのかるたは青木手製のものであったという。青木制作の現存する「かるた」としては、これまで百人一首《絵かるた》12点が知られてきた。31文字と読み人を描いたものが6枚（読み札）、下の句と下から三分の一ほどの区画に絵を描いたものが3枚、絵はあるが文字のないものが3枚である。細密装飾画の才能とともに、その書の達筆ぶりにも瞠目すべきものがある。青木の文学的才能と書画の才能がのびのびと発揮された作品群である。

本発表で紹介するのは、1972年にブリヂストン美術館と石橋美術館で開催された「生誕90年記念 青木繁展」においておそらく初めて展示され、河北倫明『青木繁』日本経済新聞社、1972年10月に図版掲載されて以降、長らくその存在が忘れられていたが、近年再発見された《絵かるた》《漢詩かるた》である。《絵かるた》《漢詩かるた》は、読札と取札がそれぞれ各100枚、総計で400枚が揃って現存する貴重な作品で、これまでは《絵かるた》《漢詩かるた》の読札と取札の各1枚、計4枚のモノクロ図版が掲載されてきただけで、ごく少数の関係者のみが知る作品であった。作品解説などでもとりあげられたことはなく、現時点での青木繁研究においては、新出作品と同様の価値を有するものと言える。

本発表では、まずは、《絵かるた》《漢詩かるた》の制作状況、来歴、作品の現状、書かれた短歌や漢詩のテキスト情報、書跡としての特色などを整理報告する。つぎに、これらの作品の再発見によって、青木繁芸術の重要な鍵が文学性、装飾性、遊戯性といった諸要素をあわせもつことにあることを再確認するが、その際に、琳派など日本の伝統的な装飾芸術の系譜と、西洋同時代のモダンスタイルやアール・ヌーヴォーなどの応用芸術の系譜をともに視野にいれ、それらとの連続性と独自性の視点から考察する。

結論として、《絵かるた》《漢詩かるた》を、青木繁の重要作品として位置づけるだけでなく、近代日本を代表する「手製かるた」の作例として位置づけることができると考える。また、青木繁の唯美主義的傾向が、たんに芸術制作の内にとどまるものでなく、その生き方の本質にまで及んでいたことをも指摘し、琳派や文人画にも通じる青木繁の画家イメージを提示してみたい。